

お宝スポット



発行：飯能市教育委員会教育部生涯学習課（文化財担当） 〒357-8501 飯能市大字双柳1-1 Tel (042)973-2111
第7号 平成24年3月30日発行 平成18年3月31日創刊

飯能まつりと縄文時代の土偶を学ぼう

● 第7号の特集は「飯能まつりと土偶」

今回は飯能まつりと岩沢の加能里遺跡から出土した土偶を取りあげました。飯能まつりについては、飯能まつりの成り立ちを最初に、山車やお囃

子について、今回から3回のシリーズで紹介していきます。また、平成23年度に調査を行った加能里遺跡から出土した土偶にスポットを当ててみます。

特集「飯能まつり」

飯能市文化財保護審議委員会委員
小槻 成克

① **はじめに** みなさん、飯能の秋の風物詩「飯能まつり」をご存じですか？ 毎年11月の第1土日に飯能の市街地、商店街を会場として盛大に開催されています。昨年(2011)は生憎の雨にたたられましたが、それでも13万人の人出を記録しています。

観光資源としても有望な「飯能まつり」一番の見どころは各町から繰り出す自慢の山車・屋台によるお囃子の競演、曳き合わせです。大勢の観客の前で十分に稽古した演技を披露する囃子連の雄姿は素晴らしい一言です。

今回から3回シリーズで、「飯能まつり」の歴史や飯能に伝わるお囃子、また伝統ある山車や屋台について、より一層関心と興味をもってもらうようお話ししたいと思います。

② **市街地の発展と町内会** 飯能の市街地は、今の大通り(中央公民館から広小路まで)を中心に発展しました。江戸時代、大通りから北側が飯能村、南側がくげぶん久下分村、広小路から北東方面が真能寺村(今の原町)で、この3村をひっくめて飯能町(宿)と呼ばれていました。江戸初期から縄や笹を扱う「縄市」が立ち、その後絹織物なども扱われるようになり、町はどんどん繁栄します。

江戸時代半ばより飯能町(宿)では市の座割の関係から、村境をまたぐ形で西側から上宿・中宿・下宿の3町に

分かれて自治活動を行っていました。明治時代になると、3町は今の自治会のもととなる三丁目・二丁目・一丁目町内会となり、同時に周辺の河原町、宮本町や真能寺村分の原町地区にも町内会ができます。

③ **「飯能まつり」以前の祭礼** 江戸時代より、飯能村には鎮守の飯能諏訪八幡神社(お諏訪さま)があり、5町内(一・二・三・河・宮)でお祭りし、真能寺村の飯能八幡神社(八幡さま)は原町がお祀りしていました。

平成23年「第41回飯能まつり」ポスター

飯能市民会館の隣りにあるお諏訪さまは永^{えい}正^{しやう}13年(1516)に勧請^{かんじやう}された古社で、祭礼^{あんえい}時安永年間(1770年代)開始とされる3匹獅子舞が奉納されていました。獅子舞が境内だけでなく隊列を組んで氏子5ヶ町をめぐるので見物人が街中にあふれ、各商店の売り出しも盛んで、近隣一番の大きな祭礼でした。

明治の半ばになると、祭礼に山車・屋台を曳いてお囃子を奉納する町内が現れます。明治15年の原町を皮切りに河原町、三丁目、一丁目、二丁目、宮本町が大正末までに、前田(八幡さま氏子)、柳原(旧加治村)が戦後すぐに、それぞれ山車・屋台を手に入れ曳き出すようになります。

祭礼はその後御大典・紀元二千六百年等の大規模記念祭や戦時中断を経て戦後にいたり、昭和32年(1957)開催の市制施行・市域合併記念祭でピークを迎えます。

ところが60年代以降、世の中が高度経済成長期に入ると、アナクロな神社の祭礼は顧みられなくなり、せっかく手に入れた山車・屋台もあまり曳かれなくなるのです。

4 「飯能まつり」新設 その後、昭和40年代に入ると明治百年記念(1968)やディスカバリージャパンキャンペーンに代表される郷土日本の魅力を見直す風潮が起こり、飯能でも観光協会や商工会議所、地元商店街、地元自治会が中心となって飯能まつり協賛会が組織され、昭和46年(1971)第1回「飯能まつり」が全市をあげて開催されたのです。

市街地の山車・屋台曳行はもちろん、郊外地区囃子団体の居囃子での競演、さらに各神社に伝わる獅子舞や鳶組合による梯子乗り、民謡流しパレード、小学児童による鼓笛隊、市民主体の模擬店・催事等々盛りだくさんの内容となりました。

その後、回をかさねるごとに参加団体が増え、山車・屋台参加町内も中山、双柳、本郷が加わり、現在11町



山車の曳き合わせは飯能まつりの華(平成23年)

内が曳き廻しを行っています。

5 「飯能まつり」の特色 「飯能まつり」の特色は①山車・屋台曳行や居囃子、獅子舞などの伝統的行事と市民パレードや模擬店、イベントなどの市民祭りとが程よく融合している点。②神社の山車祭礼を母体としたので、祭りのメインは山車・屋台の曳行と引き合わせだという点の2点ではないでしょうか。

また近年山車による神社参拝(宮参り)が途絶えたり、神社に祭礼幟旗が掲揚されないなど神社祭礼色が希薄になっているのが心配な点です。

一方で①祭礼時の町内会の事務所である「会所」が復活している、②お祭りの会場である各商店街に昔ながらの街頭装飾(軒端揃い)が継続されている、③山車の隊列が「万燈が先頭で手古舞が続く」など従来通りで変更がない、④参加する囃子連をはじめ町内の人たちの服装がいずれもお揃いの長着(着流し)または裃で統一されている等、他所のお祭りではすたれてしまった昔ながらの祭礼作法を守っているところが素敵であり、見どころでしょう。

次回は「飯能まつり」の華、お囃子についてお話ししましょう。

祭礼日の変更 お諏訪さまと八幡さまの祭礼はともに9月26・27日で同日開催していましたが、その日は台風の特異日でもあり、せっかく準備したのに荒天で中止の年も多かったそうです。「飯能まつり」になると今度は晴れの特異日である11月2・3日に変更となり、さらに平成11年(1999)からは、よりお祭りに参加しやすいように週末の11月第1土曜・日曜日に改められました。

1 **はじめに** 遺跡を発掘すると、時として不思議なものが出土します。縄文時代の土偶もそのひとつ…。一言でいえば縄文人が土を焼いてつくった人形(ひとがた)のことですが、この土偶、わたし達現代人のところを強くひきつけるようです(写真1・2)。

ひとつ例をあげると、2009年度に東京国立博物館で開催された「国宝 土偶展」

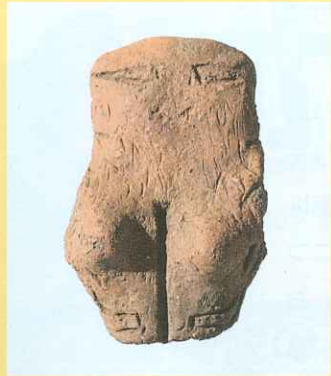


写真1 中期の土偶(加能里遺跡21次)



写真2 後・晩期の土偶(加能里遺跡24次)

は、なんと10万を超える人が見学に訪れたそうです。土偶の神秘的な造形にたくさんのひとが関心を持っていることの表れでしょう。

2 **土偶とは** 日本各地の縄文時代の遺跡からはこれまでにさまざまな土偶がみつかっています。土偶には乳房や妊娠を示す表現が多くみられることから、おもに女性を写した姿といわれています。また完全なかたちでみつかることはまれで、壊れていることがほとんどであると指摘する研究者もいます。誕生や再生、豊穡を願ってつくられたもの、わざと壊して病気やケガの身代わりをしてもらう^{よりしろ}依代、といった性格が土偶の役割だと考えられていますが、具体的には未だなぞに包まれています。

3 **加能里遺跡で新たにみつかった土偶** 2011年に大字岩沢の加能里遺跡でおこなった第43次調査では、縄文時代後期の土偶が3点もみつかりました。調査地点は入間川の第3段丘崖線の下にあたり、すぐ近



図1 加能里遺跡43次調査地点 (1/25,000「飯能」国土地理院をもとに作成)

くには今でも崖線から湧水が流れ出ています(図1)。この調査では縄文時代の後期末葉～晩期初頭の住居跡と、当時の湧水が流れた跡と考えられる砂礫層がみつかっています。次にこの調査で出土した土偶を見てみましょう。

写真3は、住居跡を覆う土のなかからみつかりました。顔を下にして出てきたのではじめは何かわからなかったのですが、裏返してみるとなんと穏やかな表情の土偶ではありませんか！ 発掘現場に歓声があがりました。両腕と下半身が欠けていましたが、立派な土偶です。

横長の頭に、中央には縦長の粘土粒を貼り付けた鼻、目は幅の広い隆帯上にヨコ線で表現されています。あごは粘土帯で輪郭が強調され、口は丸い穴となっています。

写真4は砂礫層のなかからみつかった土偶で、目の表現は省略されていますが、3の土偶とよく似た特徴をもっています。丸く大きな口が特徴的です。

3・4の土偶の後頭部に注目してみると、3は一部とれてしまっていますが、両方ともC字状の曲線的な装飾が貼り付けられています。実は同じ特徴をもつ土偶が加能里遺跡の14次調査でもみつかっています(写真5)。

これらは縄文時代後期の「山形土偶」と呼ばれる土偶の仲間、中でも後頭部のC字状の貼付けは関東北西部に多くみられる特徴です。ちなみに3・4・5は5→4→3の順に徐々に新しくなっていくと考えられるのですが、こうした土偶がある時期、飯能を含めた地域で伝統的に作られてきたことを示しています。今回みつかった3・4は関東北西部の土偶づくりの伝統の中に位置付けられるのです。

またこれらとはちがった特徴をもつ土偶もみつかって

います。写真6は砂礫層のわきに掘られた穴の壁際からみつかった土偶で、小さな頭部には穴のあいた耳がつけられています。眉・鼻・あごは粘土の貼り付けによって表現され、目の表現はありません。また口は横長の穴となっています。両腕は前方に向かって曲がっており、胸部には先が二つに尖った道具でつけた文様が施されています。おそらく両腕を前方で組み、足を曲げて座った姿勢をとる「屈折像土偶」とよばれる土偶の仲間と考



写真6 図2 合掌土偶
43次出土土偶(3)

えられます(図2は国宝となっている青森県八戸市風張遺跡の通称「合掌土偶」で、屈折像土偶の代表的な例です)。屈折像土偶の発見例は東北地方に多く、起源地が東北地方に求められる土偶です。6は関東地方で見つかった屈折像土偶のなかでも古い特徴を備えており、地域をこえた当時の人びとの交流や土偶に関する情報の伝わり方を明らかにする上で貴重な事例といえます。

土偶そのものの使い方や意味にたどりつくのはなかなか難しいのですが、その土偶がどういった技術・伝統の

のもとにつくられたものなのかを調べていくことで、土偶をつかった祭祀の広



写真7 土偶(3)の出土状況

がりや同一祭祀を執り行なった集団の関係に近づける可能性があります。研究の途についたばかりでまだ結論め

いたことをいうことはできませんが、今回出土した土偶は加能里遺跡をのこした縄文人の性格を探る上で重要なものであるといえるでしょう。

4

地中にねむる歴史へのとびら

土偶の表情をじっと見ていると、はるかな時を飛び越えて縄文人と直接つながったように感じることも、逆に全くわからなく感じることも

あります。写真の土偶を見て少しでも心が動いたなら、すぐそこに過去へのとびらが待っています。土偶をつかった縄文人たちはどういう生活を送っていたのか、どのような社会を築き、またその中で土偶はどんな役割を担っていたのか…まだなぞは残されたままです。ぜひここを入りに口に地中から発せられるメッセージに耳を傾けてみませんか!

(土偶のように、足もとにねむる地域の歴史に興味をもってもらう入り口となるような遺跡・遺物を今後も紹介していきます!)



写真3 43次調査出土土偶(1)

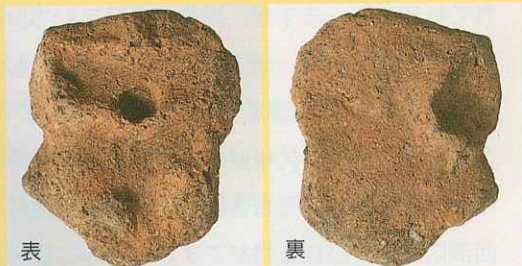


写真4 43次調査出土土偶(2)



写真5 14次調査出土土偶